

## 石棒の出土

集落から40mほど東のはずれで見つかりました。中層上面で頭部を西に向け、横に寝かせた状態でした。石棒は男性器をシンボル化したもので、お祭りや信仰の対象として使用したものと考えられます。長さ100.4cm、最大幅15.6cm、重さ31.8kgを測ります。阿賀野市ツベタ遺跡(長さ92.0cm)、長岡市馬高遺跡(同90.5cm)、阿賀町中負遺跡(同90.0cm)などと比べ、県内最大級の大きさです。



石棒出土状況(北西から)

## 下層の調査

市道2区 ※発掘調査は終了しています。

列石などあまり類例のない遺構や、膨大な遺物が見つかりました。縄文時代中期前葉の列石は全国的にみても極めて珍しいと言えます。列石から海側は堅穴住居・柱穴などが多数検出されることから、居住域と見られます。一方の山側は土器や石器、食物残渣(食ベカス)などが大量に出土する、廃棄域となっています。居住域(海側)―列石―廃棄域(山側)といった、集落内の空間利用を示す貴重な事例が示されました(下写真参照)。



市道2区全景(西から)  
居住域 ← 列石 → 廃棄域



廃棄域の堆積状況(北西から)

## KC3区

地形はKC3区の南側の新幹線側から北東に延びる尾根状の高まりが見つかり、その両側は緩やかな低地でした。尾根状の高まりは居住域として、東側の低地は廃棄域(昨年度～今年度初めに調査)として利用されました。西側の低地は遺物が少なく、根株が多く見つかりました。森林として利用された可能性があります。



尾根上の高まりと西側の低地(北東から)

## KC3区 東側

堅穴住居や土坑などが検出されています。堅穴住居は5棟見つけられました。なかでもSI9656は平面が楕円形で、長軸上に2基の石組炉が確認できます。最大径は10m近くになる大型の建物です(長さは一部調査区外に延びる為、推定)。このKC3区において、多くの堅穴住居が見つかったことは、六反田南遺跡の縄文集落の構造を明らかにするうえで、とても貴重な発見となりました。

土坑は堅穴住居の周辺で見つっています。浅いものも多く、割れた土器、石器の未製品などの遺物が出土しています。また、市道2区に比べて出土する土器が少なく、石器や石の破片が多いことから、集落で石器を製作していた可能性があります。



SI9656: 東側の大型堅穴住居(西から)

## KC3区 西側

この遺跡では数少ない焼失住居が見つかり、床面上に多くの炭化物が出土しました。その中でも、求心的に倒れた細長い炭化物は、堅穴住居を構成する部材のひとつ垂木と言います。垂木は桁から地面に斜めに組まれる棒状の材で、通常この上に茅などを葺いて屋根とします。炭化材の上に焼土が載る箇所もあることから、土屋根の可能性を示唆します。

堅穴部の周囲には礫混じりの土が幅2mほどで巡ります。これは周堤と呼ばれる高まりで、雨水などの侵入を防ぐ設備です。多くの場合、堅穴部を掘った土を盛ります。この住居の場合、礫層まで掘った土を使用しているため、多くの礫が混じっています。

規模は直径7.7m、堅穴部3.5m、深さ45cmを測ります。堅穴内部には壁に沿って幅20cm前後のテラスが半円状にありました。縄文時代の住居としては比較的小型の規模です。

## 遺物

今年度は縄文時代中期前葉～中葉(4,500年前)の遺物が多く出土しています。土器は石川県や富山県を分布の中心とする北陸系のものが多く、これに東北系、越後系、中部高地系が加わります。石器は糸魚川地域の特産品であった蛇紋岩製の磨製石斧の製品・未製品、及び工具類が多く出土しています。また矢筈の石材であるヒスイの原石や剥片も多く出土しています。土器や石器を見る限り、各地との交流が推測されます。

このほか廃棄域からは魚や動物の焼けた骨、種子などの微細遺物も多く見つかり、当時の食生活や環境が分かるものと期待しています。



焼失住居内の炭化物(北西から)



焼失住居周囲の周堤(南から)



縄文土器(下層出土)



ヒスイ(下層出土)



縄文土器出土状況(東から)